

## 1 黒斑病

### A 生態と防除のねらい

- 1 主な伝染源は病種いもであるが、土壌伝染もする。種いもは病斑の無いものを選び、伏せ込み前に種いも消毒を行う。床土も無病土（水田土壌など）を用いるか、消毒したものを使用する。
- 2 植え付けにあたっては、事前に病斑のある苗や生育不良の苗は除去した上で、苗を消毒する。  
なお、採苗の際は種いもから3 cm上の部分で切るようにする。

### B 耕種的防除法等

- 1 発病ほ場からの採種をやめ無病の種いもを用いる。
- 2 種いもは掘り取りから貯蔵までていねいに取り扱い、なるべく傷をつけないようにする。
- 3 種いもを47～48℃に正確に40分浸漬、または苗を47～48℃に正確に15分間浸漬（苗の下端10～15 cm）する。

## 2 紫紋羽病

### A 生態と防除のねらい

- 1 土壌中に残った菌核や菌糸が伝染源となる。病原菌は長期間土壌中で生存し、防除も困難なので、病原菌の密度を高めないことが重要である。被害いもは腐敗する前にていねいに掘り取って処分し、ほ場の衛生管理に努める。
- 2 イネ科作物以外のほとんどの作物に寄生するので、発病ほ場では3～5年間イネ科作物を栽培し、病原菌密度の低下を図る。
- 3 薬剤だけの防除は困難なので、耕種的防除と組み合わせた総合防除が必要である。

### B 耕種的防除法等

- 1 被害残さを除去し、ほ場の衛生管理に努める。
- 2 局部的に発生するケースが多いので、発病した場所には、いも蔓のすき込みや有機物の施用は行なわない。
- 3 発病ほ場では少なくとも3年以上イネ科作物を栽培する。

## 3 つる割病

### A 生態と防除のねらい

- 1 保菌種いもや土壌中に残った病原菌が伝染源となるので、健全な種いもを用い、発生の多いほ場では連作を避け、土壌消毒を行う。
- 2 苗床でも発生がみられるので、下葉が黄変するなど発病の疑いのある株は種いもごと除去し苗として使用しない。

### B 耕種的防除法等

- 1 発病の多いほ場からは種いもを採種しない。
- 2 健全な苗を選んで植える。
- 3 被害残さの除去に努め、多発ほ場ではイネ科作物と輪作する。
- 4 耐病性品種を選ぶ。

## 4 かいよう病

### A 生態と防除のねらい

- 1 土壌中の病原菌が主な伝染源となるが、り病種いも、り病苗も伝染源となるので、発病地では連作を避け、健全な種いもを用いる。
- 2 植え付け時の地温が高いほど発病が多く、また高pH、高ECのは場で発生が多い傾向が見られる。塩類集積、高温乾燥などによる植物体の衰弱が発生の誘因になると考えられるので、良質の有機物を施用し、適正な肥培管理を行うとともに、植え付け時期をできるだけ早くする。

### B 耕種的防除法等

- 1 深耕により下層土をぼう軟にする。
- 2 良質の有機物を施用し、また適正なpH、ECになるような肥培管理を行う。
- 3 植え付けは高温時を避け、できるだけ早植えをする。
- 4 株元にわらなどで覆いをし、地温の上昇を防ぐ。

## 5 立枯病

### A 生態と防除のねらい

- 1 主として地下部の茎及び葉柄に、円形にくぼんだ黒色病斑を生じる。塊根表面にも円形の黒色病斑を作る。菌密度が高い場合には生育が制御される。
- 2 第一次伝染源は汚染土壌であるが、種いも及び苗床の土壌汚染が、本ぼの汚染につながる可能性がある。
- 3 地温が25～40℃で発病し、最適温度は35℃前後である。従って、マルチ栽培では、栽培時期によっては発病が著しく助長される。
- 4 発病は土壌pH6.0以上で激化し、5.2以下で極めて軽微である。
- 5 葉が萎れるような乾燥条件下では発病が助長される。

### B 耕種的防除法等

- 1 無病種いもを使用する。
- 2 石灰質資材の施用をひかえ、硫黄華などを用いて土壌のpHを適正に保つ。
- 3 マルチ栽培では、栽培時期によっては地温の上昇を防ぐ工夫が必要である。

## 6 葉巻病

### A 生態と防除のねらい

- 1 病原ウイルスはサツマイモ葉巻ウイルス(SPLCV)でタバココナジラミにより媒介され、種いもでも伝染する。
- 2 感染いもは萌芽時に顕著な葉巻病徴を示すが、その後、病徴は軽くなり苗床後期にはほとんど消失するので、萌芽期に病徴を示す種いもの抜取りとタバココナジラミの防除を行う。

### B 耕種的防除法等

- 1 無病種いもを使用する。
- 2 萌芽時に葉巻病徴を示す種いもを早期に抜き取る。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項

苗床ではタバココナジラミの防除を行う。

## 7 帯状粗皮病

### A 生態と防除のねらい

- 1 サツマイモ斑紋モザイクウイルス（SPFMV）の一系統（強毒系統）によるウイルス病である。
- 2 発病は株単位で現れ、いもの表面に帯状のひび割れや肌あれ等の症状を示す。茎葉ではいもの発症の有無を判別できない。
- 3 SPFMVは、り病した種いもが伝染源となる。モモアカアブラムシにより伝搬される。土壌伝染はしない。

### B 耕種的防除法等

- 1 無発病地の種いもを使用する。
- 2 茎頂培養によって育成された健全いもを、種いもとする。
- 3 いずれの場合も、再汚染の可能性があるので、毎年種いもを更新する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項

モモアカアブラムシの防除を行う。

## 8 ナカジロシタバ

### A 生態と防除のねらい

- 1 土壌中で越冬した幼虫は4月頃から第1回成虫として出現し、その後4～5回発生を繰り返す。卵は葉裏に産みつけ、ふ化幼虫は小さい穴をあけて加害するが、老熟すると葉柄のみを残す大きな被害となり、7～8月の食害は収量にも影響する。
- 2 防除は早期発見に努め、老熟幼虫には薬剤効果が劣るので、若齢幼虫のうちに防除する。
- 3 早掘りでは普通植えのものに比べ、被害が著しい事例が多いので、防除が手遅れにならないよう心がける。

## 9 ハスモンヨトウ

### A 生態と防除のねらい

- 1 早掘りでの被害は少ないが、普通植えの場合、9月以降の食害が著しい。
- 2 老熟幼虫になると、日中は物かげにかくれて夜間に食害する。また、老熟幼虫に対しては薬剤の効果も劣るので、病害虫防除所のホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>) に掲載されるトラップデータ等の情報に留意して早期発見、適期防除に努める。

## 10 イモコガ (イモキバガ)

### A 生態と防除のねらい

- 1 年6～7回の発生で、成虫態で枯草、垣根などで越冬する。4月上旬～中旬に苗床に飛来した成虫が葉裏に産卵する。ふ化幼虫は葉の裏面をつづったり、2枚の葉を合わせて内側から表皮を残して葉肉を食害する。
- 2 普通植えでは、苗床時と本ぼの9月以降が発生が多く、盛夏期は少ない。
- 3 早掘りの作期は、発生が比較的少ない時期にあたるが、常発地では本ぼ定植後の発生に注意する。
- 4 早期発見に努め、発生初期に防除の重点をおく。

## 11 コガネムシ類

### A 生態と防除のねらい

- 1 年1回の発生で、幼虫態で越冬する。サツマイモでは栽培型あるいはコガネムシの種類にもよるが越冬幼虫による春季の被害、新世代幼虫による夏秋期の被害が問題となる。
- 2 防除は植え付け前に薬剤を土壌混和し、生育期（新世代幼虫の加害初期）にも薬剤を株元に散布する。

## 12 ハリガネムシ類

### A 生態と防除のねらい

- 1 主としてマルクビクシコメツキ、クシコメツキなどの被害が多い。
- 2 越冬幼虫の活動開始時期と早掘りカンショの生育が合致するため、イモに針金を刺したような食害痕をつくり、品質低下の原因や土壌病害の侵入口となる。
- 3 火山灰土壌、排水のよい洪積土壌で腐植質の多いところで多発する。
- 4 ほ場内の被害は一般的に周辺部で多く内部で少ないが、密度が高いと被害はほ場全体に及ぶ。